私と魔法とその他大勢と

ASH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と魔法とその他大勢と

【Ｎコード】
Ｎ７９２３Ｊ

【作者名】
ＡＳＨ

【あらすじ】
かなり容姿が整っている主人公。実は両親が魔法使いだった！！
そんなこんなで主人公も膨大な魔力をもっていた！
なかなか自分を喚んでくれない主人に早く会いたくて使い魔が逆に喚んじゃった！？
主人公（女）の異世界ファンタジーライフ

人物紹介・その他（前書き）

ネタバレ注意！！

出来れば、登場人物が増えるたびに追加したいと思ってます。

人物紹介・その他

貴峰悠希（たかみねゆうき）　１７歳　一人称；私

容姿；黒目銀髪（学校など普段は染めている）　中性的な美形
魔法行使時眼は金色になる　腰までの髪を後ろでゆるく縛る
身長１６８？　体重５４？　Ｃカップ（普段はさらしを巻いている）

性格；普段は鋭いが恋愛関係には鈍い
両親の放蕩癖に悩まされていたがある日リジアという世界に逆召喚される

ミリア・ベアルーフ　１６歳　一人称；わたくし

容姿；金髪碧眼　ロリ体系
腰より長いふわふわカール
身長１４２？　体重３８？　ＡＡカップ無い

伯爵家の娘。父伯爵は王宮魔法省に勤めている

リジア

悠希が逆召喚された世界。
中世ヨーロッパの様なたたずまい。魔法により生活水準は高い。
魔法、ドラゴン、魔獣、獣人などがいる世界。

ノウスダリア

リジアで一番大きな国。

人物紹介・その他（後書き）

名前の出た登場人物と世界を少し書かせてもらいました。

序章

《悠希へ
父さんと母さんはドラゴン退治に行ってきます。
2泊3日のつもりですが、少し過ぎるかもしれない。
お父さんたちがいないからといって羽目をはずし過ぎないように。

ps.
おみやげはご当地の名産品だ！
あそこは果物がおいしいらしい》

「あんっの！くそおやじぃ～～！！」

またか！また、なのか！！いつもいつも、朝起きたら残されている、この手紙！！
何なんだよ！この内容は！！ドラゴン？ふざけんな！現代日本に！
いや、全世界探してもドラゴンなんているわけねーだろ！頭おかしいのか？それとも、わたしをからかってんのか？
ああ～っもうどうでもいい！いつものことだ！よし、よ～し落ち

着け、貴峰悠希(たかみねゆうき)こんなことにかまっている暇はないぞ。そうだ、今日は休日だ、思う存分二度寝するときめたじゃないか！そうだ、これは神様がくれた、私へのプレゼントなんだ。何時もうるさいあの両親から引き離してくれたんだ！よし！寝よう・・・。

部屋に着いたらベットにダイビングした。もちろん、布団は羽毛１００％ふわっふわだ

その気持ちよさにわたしは、すぐ夢の中の住民になった。

《・・じ・・。・・ある・・》

誰かに呼ばれているような気がする。

それはとても遠い場所で、今のわたしには見つけることが出来ない。

遠くで嗚咽を堪えて一人で泣いている。

どうしてそれは涙を流しているのだろう。

それは私に必死に手を伸ばしている。

届くはずがないのに。

《あ・・じさ・・・。ある・・さま！》

それは必死に手を伸ばす。だけど届かない。私とそれとの間にはまだ越えられないものが・・・。

「はぁ、はぁ。

また、あの子の夢・・・。

君は誰なんだ・・」

変わらない日常。その中の小さな変化・・・。

少女は出会う・・・自分の大切な者に・・・。

序章（後書き）

主人公は女の子です
学校にファンクラブがあるほどの美形
女の子にも男の子にも人気があります

誤字脱字報告や感想、改良点などいただけるとありがたいです

第一話　少女の日常

「お・・・おはようございます！」

顔を赤くした女生徒があいさつしてきた

「うん、おはよう」

「はよ、貴峰～」

今度は上級生であろう男子生徒があいさつしてきた

「おはようございます」

それから、教室に入るまでいろいろな人達が悠希に挨拶をしていく

悠希は雑誌のモデルをしてくれ、とその道のプロの人達に何度もスカウトされる程の美形だ。

しかも、その容姿は中性的で女性とも男性ともとれるもので、男女問わずファンは多い。

ファンクラブはもちろん、親衛隊まであるとかないとか。

「おはよう、ゆう。今日も相変わらず人気者ね」

彼女は幼馴染兼親友のみう。

姉のようにいつも悠希を見守っている、邪な感情を持つ女は、彼女

によって影ですべて排除されている。

「はよ、別に人気者になりたいわけじゃないよ。ふぅ、本当になんで私みたいなのに皆かまうのかな～。世の中不思議だね～」

「わたしとしては、何であんたがそんなに鈍いのか不思議なのよね～」

「チース、おつかれさんゆう」

彼はとき、こちらも幼馴染兼親友（本人曰くソウルメイト）で、悠希が男共に喧嘩を売られたら共闘し男共を叩きのめす。付けられたあだ名が虎と獅子。虎のように俊敏性などスピードで敵を倒す悠希と獅子のように力で倒すのがときだ。

「はよ、今日もぎりぎりだね」

「おうよ！学生の二度寝はステータスだからな」

「誰が決めたのよ、そんなこと」

「はいはい、喧嘩しないでね～」

「なに言ってるのゆう。この低脳が私と喧嘩できるほどの知能を持ってると思う？」

「だれが低脳だ誰が？！」

「まあまあ、痴話喧嘩もそのくらいにね」

「「ちがう！！」」

「あははは」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――

何もない、ただ暖かなこの場所には声をころした泣き声が聞こえていた。

『・・・まだ、まだですか・・・主様ぁ・・・』

《どうしたのです》

《どうしました》

《どうした》

《どうしたんですか》

『うぅ・・・主様が・・・喚んでくれない・・・はやく会いたいのに・・・』

《では、こちらが》

《ではこちらから》

《こっちが》

《こちらが》

《《《《喚べばいい（でしょう）（だろ）（のでは）》》》》

『こっちから、喚ぶ？』

《《《《そう》》》》

何もない、ただ暖かなこの場所には、もう泣き声は聞こえない

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー

「今日も多かったわね、出待ちの人」

「そうだな、いいよな～他校の女子があんなにいっぱい」

「そう？だったら何人か紹介しようか？」

今は、学校の帰り道。
出待ちの人の相手をしていたら、すっかり遅くなった

「あっじゃあ、二人ともここで。また明日ね」

「おう、また明日」

「ゆう、きおつけて帰るのよ」

「わかってるよ」

みうとときは交差点を右、わたしはまっすぐ行った

私はいつも貫ける公園を通った。

公園は静かで誰もいなかった

『・・・じさま、あるじさ・・』

声が聞こえたと思ったら、同時に激しい頭痛がした

「！・・・うっ・・・あ、頭が・・・！？」

頭痛はだんだん激しくなる、それと比例するように声も鮮明になっていった。

そして、悠希の意識が途切れた。

ある春の日、地球から一人の少女が姿を消した。

第二話　逆召喚

「――――――・・・ぶですか？・・・・・の・・・」

草のにおい？あったかい・・・。

「・・・だいじょうぶ・・・ですか？・・・・きこえ・・・」

うるさいなー。安眠妨害は立派な犯罪だぞ。

「・・ちょっと、大丈夫ですか？眼を開けてください！」

あ～はいはい、わかりましたよ～今眼を開けますよ！

目を開くと金髪碧眼の美少女が顔を思いっきり近くに寄せていた・・・。

「って、なにしてんの？」

「あっ大丈夫ですか？こんな所で倒れているから何事かと思いましたよ。

立てますか？」

金髪碧眼の子は手を差し出してきた。

だが私は手をとらない。なぜなら今までこんな風に出会った人とは、必ずと言っていいほどの確率で面倒な事になったからだ。

私は自分で立ち上がった。

「・・・あの、ここはどこですか？」

私の目の前には、果てしなく続く草原が広がっていた。

「ここは、ヒトラー草原。ノウスダリア皇国の夏の避暑地として有名ね。私もいま避暑できてるの」

・・・ノウスダリア？そんな国あったけ？・・・って、あるわけねーよ！

マジでここどこなんだ？この金髪碧眼ちゃんの服も中世ヨーロッパの貴族みたいだし？

「ところでどうして、このような所で眠っていたのですか？」

「う～ん。どうしてだろうね。私にも良くわからないんだよ」

うん、わからない。公園にいたとこまでしか覚えていない・・・そもそも、ここは地球なのか？ノウスダリアなんて知らないし、今どきこんな服着ているのは、コスプレイヤーの人・・・って言ってもイベントがあるわけでもないし。立ち振る舞いも堂に入っている。

う～ん・・・。まあ、いいか。なるようになるだろう。

「！・・・もしかして、あなた・・・！！」

金髪碧眼の子は顔を真っ青にして言った。

「・・・記憶喪失なのね？！」

金髪碧眼ちゃん。べた過ぎますよ・・・。

「う～ん。ここの知識がないので記憶喪失のようなものですね。」

「そっ！そうなの！いや～ん、当てずっぽうで言ったのに、当ったちゃったわ！！」

当てずっぽうって・・・。

「それじゃあ、困ってるのよね？よろしかったら家にいらしゃいませんか？もちろん、お客様としてです。」

あ～。どうしよう。別に行く当てもないし・・・ていうか知識すらないし・・・

「・・・それじゃあ、よろしくお願いできますか？」

金髪碧眼の子は私の言葉にぱあっと顔を輝かせた。

「ええ！それじゃ家にいらしゃい。あ、自己紹介がまだでしたわ。わたくし、ミリア・ベアルーフ。父は伯爵よ」

第二話　逆召喚（後書き）

中途半端に切れましたすいません！！

第三話　幼女の別邸

悠希はミリアに連れられベアルーフ家の別邸に着いた。

「でかっ」

悠希はベアルーフ家の別邸に着いたとたんそうもらした。

貴峰家も近所では評判の豪邸であったが、やはり本場？は違う「これが別邸！？」というほどの大きさだ。

「ふふ。そういってもらえると嬉しいわ。
この別邸はねお父様が私のために建てて下さったの。
エレサレナ公爵様がとっても大きくてでも繊細でやさしい面持ちの別邸をお建てになったんですけどね、それがとても素敵で・・・。
そして、愛しい娘のために建てたというのを聞いて自分も娘のためにって。
エレサレナ公爵家のよりは格段に劣りますけど私のためにって言うのが嬉しくてとても気に入ってますの」

ミリアは本当に嬉しそうに言った。見た目幼女なだけあって可愛かった。

邸の扉に着いた。

『リューフ』

扉を開けるときにミリアが呟いた。

すると、扉がひとりでに開き始めた。

「…へ～、すごいね～…」

悠希は呆気にとられながら呟いた。

「ふふ。すごいでしょう。ベアルーフ家は代々魔法が使えるの。だから、お父様は魔法局で魔法局長補佐をやっているのよ。」

扉が開くと侍女が出てきた。

ミリアは客間の準備を侍女に言いつけると自分の部屋に案内した。

ミリアは移動中いかに自分の父親がすばらしいのか、そしてエレサレナ公爵をどれ程自分が尊敬しているのかなどを延々と語り続けた。

第三話　幼女の別邸（後書き）

短いです、ごめんなさい。初めてこんな短いの書いたかも・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7923j/

私と魔法とその他大勢と

2010年10月10日15時39分発行